

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.13) 2007.1.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

緒言 川崎富作

2007年の年頭に当たり一言ご挨拶申し上げます。昨年、わが研究センターには2つの大きな吉報がありました。

その第一は天皇、皇后両陛下に直接川崎病についてお話しいたしたことです。昨年8月初旬宮内庁侍従職より、「天皇、皇后両陛下が川崎と懇談したいが受諾するかどうか。」との電話を受け、「大変光栄です」と返事したところ8月11日にFAXがあり、8月18日(金)14:00に「天皇、皇后両陛下御懇談」の行事として場所は「御所」、所要時間は1時間程度と記されていました。服装は平服、参集は当日東京駅丸の内中央口に13:40頃とあり、指定の時刻に行くと一人の宮内庁職員が待っていてその案内で宮内庁の車で宮城に入り、両陛下のお住まいである御所につくと、侍従が一人玄関で待っていて、その案内で御所の待合室で5分程待ち、また侍従の案内で両陛下の待たれる部屋に伺った。両陛下は立ち上がって私を迎え入れて下さり、早速持参した川崎病資料(臨床像カラー写真および第18回疫学調査成績など)を両陛下にお渡ししてご説明申し上げ、いくつかのご質問にお答えしアツという間に一時間が経過しました。両陛下が川崎病に深い関心をもたれていることを知り、また今般ご懇談の機会を与えられて、生涯忘れ得ぬ光栄の日でした。丁度細川静雄・原信田実両氏の著書「川崎病はいま」が出版されたので、両陛下に一冊ずつ献上申し上げました。

第二は1億2千万円が故廣永浩子様の遺言

によって川崎病の研究のためにと生存科学研究所に寄付されたことです。事は昨年10月に開催された第26回日本川崎病研究会(大阪)に出席した際、近畿大学の篠原先生から今回のお話しを伺ったことに始まります。その後10月17日付けで大阪の武内小児科院長武内克郎先生から私宛にFAXを頂きました。それによると武内先生と以前ロータリークラブで一緒であった大阪の小林俊明弁護士から武内先生宛てに10月12日付けで手紙が届き、「ある医師(故人)の奥様の遺言執行人となっているのですが、過日その奥様も亡くなられ、その遺言の中で「子供の病気に関する研究機関」に遺産の3分の2を寄贈するようにとの一文があります。この方はすべての財産を寄贈して役立てたいとの希望をお持ちでした。私(小林弁護士)としては出来れば非常に貴重な研究をされているのに研究費が少なく困っているような機関もしくは団体が良いのではないかと思います。そこで先生は小児科医でもあり、この点についてはよくご存知ではないかと思ってお尋ねする次第です。」この手紙を受けて武内先生は旧知の近畿大学助教授の篠原徹先生に相談され、私宛にもすべての資料を送って来られたのです。

そこで私は折角の多額のご寄付なので、免税措置が必要と考え、生存科学研究所の鈴木雪夫専務理事と小林芳子事務局長に相談しました。お二人は早速文部科学省に赴き主旨を伝え、担当者の理解も得られたとの事で、生存科学研究所の小林事務局長から小林俊明弁護士宛てに寄付受け入れの諸手続き終了の

連絡をして頂きました。その後、12月11日付けで生存科学研究所に1億2千万円が振り込まれました。早速(財)生存科学研究所江見康一理事長、評議員川崎富作の連名で廣永浩子遺言執行者小林俊明弁護士宛てに「このご浄金は川崎病研究のために、日本川崎病研究センターとの共同研究に使わせていただき、ご遺志に報いるよう努力するつもりでございます。」との文言で返信しました。このような篤志家の浄財のご寄付をうけ、私はその責任の重大さを肝に銘じて今後の川崎病研究遂行の糧にしたいと決意を新たにしました次第です。

本ニュースレターには国立循環器病センター総長北村惣一郎先生および日赤医療センター小児科部長麻生誠二郎先生から貴重な玉稿をいただきました。(当センター理事長)

『川崎病診療雑感』

麻生 誠二郎

新年明けましておめでとうございます。

1975年4月に千葉大学小児科に入局、1年間千葉大学で研修した後1976年4月に2年目研修医として日赤医療センター(以下日赤)に勤務いたしました。大学では1例のみ経験した川崎病(当時は“急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群”という長い名前でした)ですが、日赤にきてからの1年間では19名の患者さんの主治医として診療にあたりました。

当時は心エコー検査のない時代です。臨床症状、血液検査所見、心電図所見から冠動脈瘤の有無を推測するのですから、ご両親への病気の説明は厳しい内容にならざるを得ませんでした。・・「頻度は非常に少ないのですが、将来心筋梗塞を起こして突然死する可能性があります」「お子さんの場合は症状から大丈夫だと思いますが、確実なところはわかりません」・・といった具合です。病気の説明でご両親を泣かせてしまうことも度々ありました。治療はアスピリン単独です。現在より入院し

てくる病日が遅く治療開始も遅かったためもあり、現在診ている川崎病の患者さんよりも症状が一般的に強く重篤であったという記憶があります。眼球結膜が“うさぎの目のように真っ赤”で、口唇も乾燥し出血し血痂がべっとり付き、治療してもなかなか解熱せず高熱で朦朧としている、といった様子でした。当然ながら入院期間も長く、平均すると40日間近くの入院でした。(最近では平均12.5日です)。

私は以来日赤にお世話になり早30年になります。川崎富作先生のもと故大川澄男先生、菌部友良先生、柳瀬義男先生、今田義夫先生、土屋恵司先生ほか、多くの先生方と一緒に川崎病の患者さんの診療にあたってきました。

この30年間で川崎病の診療状況は大きく変わり、医療の進歩により患者さんが救われる様子を目の当たりにしてきました。先ず、入院病日が早くなりました。以前は典型的な症状が揃ってから入院することが大多数でしたが、最近ではインターネットなどで情報を得て、ご両親が川崎病を疑われて来院されることもあります。診療の質をガラリと変えたのは検査では心エコーの導入、治療ではγグロブリン大量療法です。ご家族への説明も以前とは違います。・・「これからγグロブリン大量療法を行ないます。24時間かかりますが熱も下がるし大分楽になりますよ」と、自信を持って説明できます。診療が極めてスマートになり入院期間も大幅に短縮されました。後遺症も激減しました。・・・・後は原因究明です。

将来は、「血液検査で川崎病抗原が陽性でした」とか「川崎病のワクチンを接種しましょう」といった説明ができるようになるかも知れません。原因が究明され川崎病の予防ができ、後遺症をゼロにできる。こんな診療を是非とも体験したいものです。(日赤医療センター小児科部長)

『川崎病と子供のバイパス手術』

北村 惣一郎

昨年(平成 18 年)は私にとって嬉しい年でした。私が川崎病外科治療に取り組んでから 30 年、内胸動脈を用いた第 1 例目から 20 年が経ちました。当初は、ものすごい冠動脈瘤と閉塞で死亡した子供を見て、外科医もこの治療に参画出来ぬものかと思ったことが始まりでありましたが、そのうち加藤先生、直江先生のすばらしい論文に刺激されて、米国の外科医も興味を示しはじめました。そして、川崎先生の名のついた病気の治療開発を外国人にやられては、恥ずかしいという気になっていきました。過去 30 年間、多くの方々に支えられ、手術をして来ました。10 年位前から外国からも教科書の執筆依頼が来るようになり、英語やスペイン語の教科書にも載るようになり、知ってもらえるようになって来ました。そして、昨年、川崎先生が御推薦下さり、武田医学賞 100 人目の栄誉を頂きました。この間、日本川崎病研究会、多くの小児循環器科、心臓外科の先生方、奈良県立医大第三外科、国立循環器病センターの諸氏に支えられての受賞であったと感謝しております。紙上を借りて皆様に厚く御礼申し上げます。

内胸動脈を用いた川崎病小児第 1 例目が術後 20 年を経て、昨年 10 月にカテーテル検査を受けてくれました。グラフトは極めて良好に開存内胸動脈は一生もつグラフトと考えています。

武田医学賞を頂いた時、「川崎病の子供をもつ親の会」の浅井 満氏もたいへん喜んで下さり、『この 25 年の中でも数多くの子供達がバイパス術によって救われていると確信しております。大伏在静脈から内胸動脈へ、グラフトであるその内胸動脈が先生が示して頂いたスライドで成長していることを確認した時、正直鳥肌が立っておりました。これで、「川崎病児はなんとかなる」との思いを抱いたことを記憶しております。』との丁寧なうれしいお手紙を頂きました。これも大変嬉しいことでした。

また、年末にはドイツから Kitamura operation と書かれた Kawasaki 病の論文が ASAIO Journal, Vol. 52 (6), Nov. -Dec. 2006, pp. e43-e47 に出ていることをこれも川崎先生から教えて頂き、びっくりしました。自分でも恐縮していますが、これも嬉しいことの一つでありました。

30 年にわたり、ずっと外科医を暖かい目で見守って下さった川崎先生が今年もお元気で頑張っておられることは何よりも嬉しいことです。今年(平成 18 年)は川崎先生の最初の報告から 40 年目になります。原因究明、疾病の本態解明が残っています。これは是非、日本人の手で行ってほしい今年の期待です。(国立循環器病センター・総長)

日本川崎病研究センター

平成 18 年度公募研究助成補助金は下記の先生方にお送り致しました。

- 1) 森雅亮先生(横浜市立大学小児科)「プロテオーム解析法を用いた川崎病患者における病因蛋白質の検索(網羅的解析)」
- 2) 奥村謙一先生(大阪医科大学小児科)「川崎病の血管内皮障害における過酸化脂質の関与について」
- 3) 武村濃先生(東京通信病院放射線科)「MRI 装置を用いた心筋イメージング(Perfusion, Delayed enhance, Cine MRI)の定量評価」

事務局から

【センター日報】

平成 18 年 10 月 20 日 平成 18 年度 (財) 生存科学研究所川崎病研究会・平成 18 年度第 3 回
特定非営利活動法人日本川崎病研究センター理事会合同会議開催 5:00pm～ (於:生存科学研究所)

平成 19 年 3 月 9 日 平成 18 年度第 4 回理事会開催予定

平成 19 年 4 月 27 日 平成 19 年度第 1 回理事会開催予定

平成 19 年 6 月 9 日 平成 19 年度総会と研究報告会および懇親会開催 (於:東京 YWCA) 予定
各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。

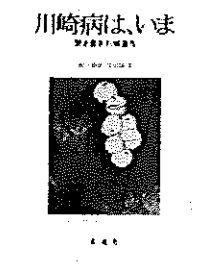
【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数 283】平成 19 年 1 月現在

〔正会員：109 名、2 法人、3 任意団体〕 ； 〔賛助会員：164 名、4 法人、1 任意団体〕

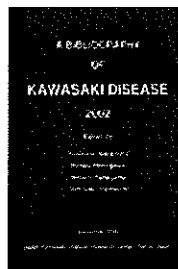
【研究会・講演会】

- ★ 第 31 回近畿川崎病研究会 平成 19 年 3 月 3 日 (土) 13:00～ 於:テイジンホール
会長:村上洋介先生 (大阪市立総合医療センター)
- ★ 第 27 回東海川崎病研究会 平成 19 年 6 月 9 日 (土) 14:00～ 於:愛知県医師会館
地下 1 階「健康教育講堂」 当番世話人:判治康彦先生 (一宮市民病院小児科)
- ★ 第 19 回関東川崎病研究会 平成 19 年 6 月 23 日 (土) 15:00～ 於:日赤医療センター
代表世話人:藺部友良先生 (日赤医療センター小児科)
- ★ 第 8 回北海道川崎病研究会 平成 19 年 9 月 8 日 (土) 於:KKR ホテル札幌
代表世話人:濱田勇先生 (札幌医師会夜間救急センター)
- ★ 第 27 回日本川崎病研究会 平成 19 年 10 月 11-12 日 (木・金) 於:品川プリンスホテル
会長:佐地勉先生 (東邦大学医学部小児科)
- ★ 「川崎病の子供を持つ親の会」問い合わせ先: Tel:044-977-8451 浅井 満

書籍紹介 (下記各在庫あります)



細川静雄・原信田実編



文献集中村好一編



川崎富作 小品集

【川崎病に関するご相談】

当センターでは、川崎富作理事長が川崎病に関するご相談を受けております(無料)。お電話お手紙、Fax
等でご相談をお寄せください。(月曜日～金曜日<但し:木曜日を除く>:午後 2 時～午後 4 時)

~~~~~  
特定非営利活動法人日本川崎病研究センター

〒101-041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階

Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124